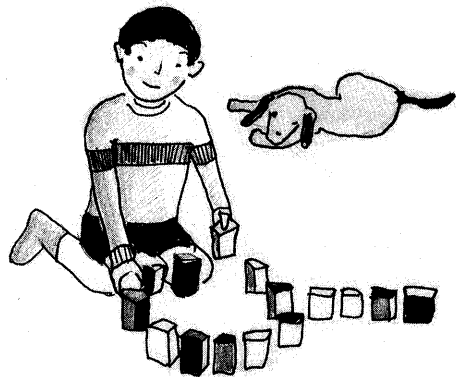


状況の中で保育はなされる

津守 真



ひとりの子どもとつき合っているときも、保育者は保育の場の全体の状況をみてとっている。たとえば、新しい子どもや特に手をかける必要のある子どもが来たときには、自分がいままでつき合っていた子どもをおいて、その子を優先させることもある。

全体の状況を優先させすぎると、抜けがないように見回る保育になって、保育に落ち着きがなくな

る。逆に、全体の状況を無視してひとりの子どもにのみ、めりこむと、関係が他の子どもたちに関われなくなってしまう。実際の保育はその中間にある。

ひとりの子どもと出会うことは、その子どもとゆっくり過ごす機会に恵まれることである。そのときにゆっくりと過ごすことが、その後の活動の糧になっていることが多い。その保育者との間に

生まれた活動を最後まで見届けることができずにその子を離れても、それはどこかで実っている。

保育者との間に積み重ねられたそれまでの状況によっては、他の子どものごとはちょっとおいて、ひとりの子どものつき合いを継続させることもある。保育は長期にわたり、毎日継続することだから、そのときの状況だけでなく、時間経過の中の状況も考慮にいれて判断する。きのう十分につき合えなかった子どもと、出会ったときは、いつもよりも密なつき合い方をするかもしれない。

長期にわたり複数の人が生活する保育の場では、その日の状況と、時間経過の中での状況との両者がいりまじっている。ひとりの保育者が、あるときにはこのようにし、別のときには違ったように振る舞う。そのときの状況の中で自ら判断し、行為し、理解をつくり上げてゆく。

少し煩雑になるかもしれないが、状況とはどう

いうものかを、身近な保育の一日の中から述べてみようと思う。

夏の一日、朝、廊下にいた私は、保育室で担任のTさんと笑い合っているR子と目が合った。R子にはっこり笑い、しっかりと私の視線をとらえてはなさない。私も一緒に目を合わせて笑い、そのときを継続した。それがとても面白くなってR子は廊下に走り出たが、私の脇を通り過ぎ、二、三歩行って立ち止まり、私の方を見て笑った。以前もこういうことがあったが、その時はR子に関心のある人には真正面からは近付けないというみたいに通り過ぎて行ってしまったのだ。いまはきつと私の方を見て笑うのである。何度もそれをやってから、とうとう私の腕の中にとびこんできた。T先生と一緒にホールに行っても、戸口のかげにかくれて、私とイナイ イナイ パーをくり返す。その間でも、T先生の姿が一寸でも見えな

くなると、ベソをかいて泣きそうになる。R子と私とのこの日の交わりは朝のひとときだけだった。この頃しばしば出会うこのひとときの密な交わりが、R子と私との関係を確かなものにしていくように思う。(この子どもについては、本誌99巻9号参照)

門からS夫と母親が入ってきた。三月まで私共の学校の幼稚部において四月から普通学級にいったS夫の母は、久しぶりに私と話したくてたまらない様子で、庭の真中で学校での様子を話しはじめた。何人もの子どもが登校して傍を通っていったが、めったに会うことのないこの母親を私は優先させたいと思った。

それでもH男が登校して小走りに部屋に入ってしまったときには、私はS夫の母親との話を中断せざるを得なかった。H男の担任はそのとき手一杯

で登校してH男を受取る余裕がないことが分かっていたからである。部屋にとび込んだH男は、私と一緒にトランポリンをとんで欲しかった。いつもは朝一番に担任とトランポリンをとんで、気持ちを落ち着けてから彼は自分の活動をはじめるのである。私と一緒にとんでいるうちに、この子が次第に気持ちを寄せてくるのが分かり、私も嬉しかった。そのとたんに、H男はふと見えなくなっただ。移動するときのH男の動きは素早い。あちこち探したら、二階の隅のプレールームで、テレビをつけ、ステレオを鳴らしてひとりどとびはねていた。しばらく一緒にいたが、私はこの子をここでひとりにしておいて大丈夫のように思った。この日は庭にはプールがしつらえてあり、プールの周辺は子どもたちで賑わっていた。H男はプールも好きなのだが、子どもが大勢いるところは避ける傾向がある。今日もそのようで、一番人の気配のない二階の隅の部屋を選んだ。

私は、階下の保育室におりてくると、さっきの S 夫が私を見付けて、「えのぐ どこ？」とたずねた。私は五色入りのえのぐの箱を出してあげた。S 夫は流しと机の間を往復して水を運びえのぐをはじめた。黒色を選び、プラスチックのまま

ごとの野菜や果物を次々に黒く塗った。本人はこれを「唐揚げ」と言っているのだが、普通学級でいろいろのことを経験しているこの子の気持ちをあらわしているのだらうと、私は床にこぼれた黒い水や S 夫の足の裏を雑巾で拭きながら、興味深く思った。もしも、この子とつづけて交わる機会があれば、更に考えてゆけるのだが。幼稚部のとき、S 夫は素裸になってえのぐを身体に塗りたくった時期があった。雲の上を歩いているような頼りなげな S 夫が、自分の存在感を確かにしていったのは、えのぐを通してであった。久し振りに私共の所に戻ってきたこの子は、熱心にえのぐをして過ごした。H 夫は幼児期に自分自身を形成

した場所で自らを癒しているように思えた。もっと長時間私がこの子と遊ぶことができれば、別の展開があったかもしれないが、状況がそれを許さなかった。

トランポリンの上で、若い A さんが三人の子どもの相手をして苦勞してとんでいるのが見えた。その中のひとりはまだ歩けない小さな子どもである。私はその子を抱きとって、庭のプールに連れていった。

保育は複数の子どもと大人の生活の場だから、ひとりの子どもと遊んでも、それは皆の眼前に開かれている。私はある場合にはその子どもと密に交わりつづけるが、状況によっては、その子は他の人に委ねて、別の子どもと交わる。いろいろな大人と子どもが、たえず変化する状況の中で互いに補い合い、保育の場は上向きにつくられてゆく。

T 夫が門のところであらうろしているのが見え

た。この子は最近だれか大人と外にゆきたい。どうしてもそうしたいときには、それを叶えてあげないと、T夫の場合はそこで気持ちがつつかかって先に進まない。しばしばそれにつき会う担任のYさんが気付き、他の子をおいてT夫と外出するのが見えた。外にゆくと他の子どもに妨げられることなしに、ひとりの大人とゆっくりと交わるることができる。

帰りがけ、私はトランポリンの上にいるT夫と出会った。T夫は私に、一、二の三で高くとぶことを要求した。私も一生懸命それにこたえ、疲れて汗をかいたとき、T夫は本当にたのしそうに笑った。この子は電車の系列番号を知っていたり、丸と四角とどっちかなど、大人を考えさせることを言うので、つい知的な対応が多くなってしまふのだが、夢中になって汗をかいて遊ぶ体験が、この子には何よりも必要なのではないかと思つた。

私に呼ばれて一、二分その場を去り、再び戻ってきたとき、T夫は泣いて母親の身体に顔を埋めていた。トランポリンでつまづいて足を滑らせたのだそうで、「大失敗」と口の中で言っていた。この子は、ころんだり、人とぶつかったり、一寸したつまずきでめげることが多い、若いAさんが気を引き立てて、T夫と他の子と三人で手をつないでトランポリンをとんだ。それがうまくいって、まわりの人も一緒に、「成功」と言つて手を叩き、皆で賑やかに笑った。この日のT夫は比較的早くに立ち直つた。その前に担任のYさんと門の外でゆっくりと過ごしたので、基本的に気持ちちが安定していた。その後を受けて、私はこの子どもの一日の最後の部分を一緒に過ごしたことになる。

更に帰りがけに、T夫は庭のプールに入ったと聞いた。大勢の子どもたちがプールにいたときには、そこで気を引かれながらも果たせなかつたこ

とを、これらのことの後、やり終えて帰ることができた。私は朝からこの子のことが気になって、したが、私自身はかかわる余裕がなかった。いろいろの人が全体の状況の中で出会ったところで判断し、思い切ってゆっくりと交わることによって、それが可能になっている。

日によっては、一日の中では子どもは満たされない場合もある。それに気付けば、次の日にそれは補うことができる。

ひとり子どもとかかわるときにも、それは全体の状況の中でなされており、また、その子どもとのかかわりの経過の中でなされているので、ある時点で第三者から見える部分だけを切り取って論じることが無理がある。それは一般論としての

議論の材料にはなるが、その場の保育者の行為からは離れる。

保育者の意識の面から言っても、周囲の状況を無視して、ひとり子どもだけとかかわるときには、関係が閉ざされてしまう。保育者はひとりの子どもとゆっくりとつき合うが、それは保育の場の全体の状況の中でのことである。逆に全体の状況だけを気にして、すべてにこたえようとすると、管理的になりやすく、ひとりの子どもとの交わりを深めることができない。再びくり返すが、実際の保育はその中間にある。状況に対する配慮なしには、理念も理論も意味をもたない。

(愛育養護学校)